

日本パーソナリティ心理学会 20周年特別企画

パーソナリティ心理学 ハンドブック

日本パーソナリティ心理学会

企画

二宮克美

愛知学院大学教授

浮谷秀一

東京富士大学教授

堀毛一也

東洋大学教授

安藤寿康

慶應義塾大学教授

藤田主一

日本体育大学教授

小塩真司

早稲田大学准教授

渡邊芳之

帯広畜産大学教授

編集

この1冊で

パーソナリティ心理学のすべてがわかる決定版!

HANDBOOK OF PERSONALITY

2013年3月刊行

定価 27,300 円 (本体 26,000 円 + 税)

B5判 / 上製函入 / 780 頁

ISBN978-4-571-24049-2

福村出版

刊行にあたって

本書の前身として、1998年に刊行された『性格心理学ハンドブック』がある。詫摩武俊先生が監修し、編集企画を青木孝悦、杉山憲司、二宮克美、越川房子、佐藤達哉の5名が担当した、当時としては性格心理学を取り巻く分野を網羅した画期的な書籍であった。その「まえがき」において、詫摩先生が性格という言葉とパーソナリティという言葉のニュアンスの違いを、戦前のドイツの心理学、精神医学ではCharakterという概念が用いられ、英語圏ではcharacterよりもpersonalityが多く用いられていたことに言及している。そして、性格がどちらかというと固定的、静態的な面があるのに対して、パーソナリティには適応過程にみられるダイナミックな面が含まれると指摘している。

その後、会員の意見を聞きながら議論を重ね、「日本性格心理学会」という学会名称を2003年10月に「日本パーソナリティ心理学会」へ変更した。この名称変更は、詫摩先生の指摘をあたかも具現化したかのように思われる。

2012年は本学会が1992年6月に設立されてから20周年にあたる年であった。その数年前から『性格心理学ハンドブック』改訂の話も進行していたが、『性格心理学ハンドブック』は刊行してから10余年の月日が経過していることから、改訂ではなく学会企画の新名称『パーソナリティ心理学ハンドブック』として刊行することになった。また本のサイズも利用者の利便性を考慮しA5判から大判のB5判に刷新。内容構成は、前書を参考にしながら二宮先生が中心になり作り上げられていった。編者は、二宮克美、浮谷秀一、堀毛一也、安藤寿康、藤田主一、小塩真司、渡邊芳之の7名が担当し、執筆者として多くの新進気鋭の若手研究者を登用した。前書とは違った意味でいろいろな点で画期的なものになったと考えている。

特に引用文献の充実の本ハンドブックの大きな特長である。執筆者に出来る限り最新の文献を引用してもらい、その結果膨大な数の文献が掲載されている。本文とあわせて研究者の利用に資すれば幸いである。

日本パーソナリティ心理学会理事長 浮谷秀一

読みやすい本文と充実した引用文献

36

2 章 パーソナリティ特性論

1 節 パーソナリティ概念と人か状況か論争

渡邊芳之

1 ■ パーソナリティ概念と「人格」「性格」

パーソナリティ (personality, 独: Persönlichkeit) という語の起源が person (独: Person, 人) であることはいうまでもない。personality とは person が person であることであり、この言葉の最初の日本語訳が「為人 (人となり)」であったこともそれをよく示している (鶴殿, 2011)。

a. 人格、性格という日本語

personality の訳語である「人格」は漢語にはない和製漢語である (佐古, 1995)。personality には明治の前半に「人品」「有心者」「靈知有覚」などの訳語が充てられたあと、明治20年代になって「人格」が充てられることになる。佐古 (1995) によるとこの訳語が本格的に用いられた最初の用例の一つは明治26 (1893) 年に『哲学時報』に掲載された「心理学に於ける無意識作用論の発達」という「二重人格」を主題としたイギリスの論文の抄訳であったという。人格という訳語は心理学および隣接分野から現れ、その後哲学や倫理学、法学、教育学などに定着していったのである (鶴殿, 2011; 古田, 2004)。

なぜ「人となり」ではなく人格という語が考案されねばならなかったかには、その当時の欧米思想のなかで personality に高い価値がおかれていたことが反映されている。「すべての人がもっている人としての価値や重要性」という意味が人格という訳語、とくに「格」という漢字に込められているのだ (佐古, 1995)。

一方、類似した意味の character には長い間「品格」「品性」などのやはり価値的な訳語が充てられ、道徳教育などの文脈で用いられていた。オールポート (Allport, 1961/1968) が強調したように character も価値評価的な言葉なのである。この語に「性格」という訳語が充てられて定着する

組見本 (実物の50%)

(実物の90%)

37

1 節 パーソナリティ概念と人か状況か論争

のは人格より遅く明治後半になってからである (鶴殿, 2011)。

このように personality も character も、その訳語である人格も性格も本来価値判断的・道徳的な意味の強い言葉であった。しかし性格が人以外の特徴を示す日常語としても定着したのに対し、人格は本来の価値的な意味が強く残ったために、心理学では性格という訳語に比べて人格という訳語が使われることが減り、「パーソナリティ」とカタカナで書かれることがほとんどになった。

b. パーソナリティの外面的定義と内的定義

さてパーソナリティの定義には外面的な定義と内的な定義がある。外面的定義とは「他者の目に見えるもの」としてのパーソナリティからの定義で、後にも述べるようにパーソナリティという概念の心理学的用法はこうした外面的定義を基礎にしている。一方、内的定義とは「人の内部にある精神的・心理的な構造」としてのパーソナリティからの定義であり、哲学・倫理学や法学でいう人格はこちらを指すことがふつうである。

人格という訳語を確立したひとりである井上哲次郎は「人格と修養」(1915)のなかで「人格」とは人が人たる所以の特性を謂う」と述べたうえで人格を「自覚」と「統一」の2つの特性からなるとしている。これは「意識や記憶の連続性」と「自己同一性」といえることができ、現在にも通じるパーソナリティの内的定義をよく表している。

2 ■ 心理学におけるパーソナリティ概念

次に、パーソナリティ心理学やその他の心理学で用いられるパーソナリティ概念について考えてみよう。心理学で用いられるパーソナリティ概念には、パーソナリティについての心理学 (以下、パーソナリティ心理学とする) の「対象となる現象そのものやそれが発生する構造を指す概念」(以下、パーソナリティ心理学の2種類がある) の2種類がある。

◆ 引用文献

- American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., Revision). Washington, DC: American Psychiatric Association.
- Clark, W. R., & Grunstein, M. (2003). 遺伝子は私たちをどこまで支配しているか. 木光太郎, (訳). 新曜社. (Clark, W. R., & Grunstein, M. (2000). *Are we hardwired?* New York: Oxford University Press.)
- DeYoung, C. G., Hasher, L., Djikic, M., Criger, B., & Peterson, J. B. (2007). Morning and evening rhythms and the higher-order factors of the Big Five. *Personality and Individual Differences*, 42, 276.
- 石山宏央・内野 勝. (1995). Y-G性格検査による重症喘息児の心理的特徴: 入院についての一考察. 日本性格心理学会第4回大会発表論文集, 38-39.
- Kashdan, T. B., Vetter, C. J., Jr., & Collins, R. L. (2005). Substance use in young adults and gender. *Addictive Behaviors*, 30, 259-269.
- Malouff, J. M., Thorsteinsson, E. B., & Schutte, N. S. (2006). The five-factor model of personality: A meta-analysis. *Journal of Drug Education*, 36, 47-58.
- Matthews, G., Deary, I. J., & Whiteman, M. C. (2009). *Personality traits* (3rd ed.). London: Sage Publications.
- Nettle, D. (2009). パーソナリティ心理学の基礎. 浮谷秀一, (監訳). 東京: 東京大学出版会.

6部構成全22章107節、ベテランから新進気鋭の研究者108人による執筆陣！

I部 パーソナリティ心理学の概観

1章 パーソナリティ研究の歴史の変遷		3節 脳神経科学とパーソナリティ	国里愛彦
1節 パーソナリティ心理学の背景	浮谷秀一	4節 パーソナリティの社会的認知論	原島雅之
2節 パーソナリティ心理学の歴史の変遷	サトウタツヤ	5節 状況論・相互作用論アプローチ	青林 唯
3節 パーソナリティ心理学の展開・応用	杉山憲司	4章 パーソナリティと自己	
4節 パーソナリティの遺伝的基礎	安藤寿康	1節 パーソナリティと自己	安藤清志
5節 パーソナリティと進化心理学	平石 界	2節 自己概念の諸相	榎本博明
2章 パーソナリティ特性論		3節 人間心理学的アプローチ	木村登紀子
1節 パーソナリティ概念と人か状況か論争	渡邊芳之	4節 潜在的・非意識的なプロセスとパーソナリティ	佐藤 徳
2節 類型論と特性論	伊坂裕子	5節 ナラティブ・アプローチ	向田久美子
3節 ビッグファイブ（語彙アプローチ）	村上宣寛	5章 多様な個人差	
4節 5因子モデルの周辺	谷 伊織	1節 認知スタイルの個人差	神谷俊次
5節 日本における5因子モデルの展開	安井知己／辻 平治郎	2節 社会的認知の個人差	森 津太子
3章 パーソナリティの諸理論		3節 知的能力の個人差	岸本陽一
1節 行動遺伝学的アプローチ	山形伸二	4節 感情・情動の個人差	有光興記
2節 気質とパーソナリティ	高橋雄介	5節 動機づけの個人差	岡田 涼

II部 パーソナリティをライフステージからとらえる

6章 乳幼児期		9章 成人期	
1節 乳幼児期の気質・パーソナリティの特徴	岡本依子	1節 成人期のパーソナリティの特徴	臼井 博
2節 自己意識の形成	矢藤優子	2節 自己・自我の諸問題	伊田勝恵
3節 社会性の形成	伊藤順子	3節 社会性の諸問題	長谷川真里
4節 乳幼児期のパーソナリティの諸問題	上村佳世子	4節 成人期のパーソナリティの諸問題	鈴木乙史
7章 児童期		10章 中年期	
1節 児童期のパーソナリティの特徴	首藤敏元	1節 中年期のパーソナリティの特徴	荘厳舜哉
2節 自己意識の発達	中谷素之	2節 自己・自我の再形成	高山 緑
3節 社会性の発達	越中康治	3節 社会性の再構成	青柳 肇
4節 児童期のパーソナリティの諸問題	本城秀次	4節 中年期のパーソナリティの諸問題	龍本孝雄
8章 青年期		11章 高齢期	
1節 青年期のパーソナリティの特徴	二宮克美	1節 高齢期のパーソナリティの特徴	川野健治
2節 自己意識・自我の発達	天谷祐子	2節 高齢期の自己概念	長田由紀子
3節 社会性の発達	大久保智生	3節 高齢期の社会性	川島大輔
4節 青年期のパーソナリティの諸問題	高木秀明	4節 高齢期のパーソナリティの諸問題	中里克治

III部 パーソナリティと精神的不健康

12章 パーソナリティ障害		14章 パーソナリティと対人関係上の問題	
1節 妄想性・統合失調型・統合失調質パーソナリティ	佐々木 淳	1節 偏見・差別	中村 真
2節 反社会的パーソナリティ	大隅尚広	2節 妬 み	澤田匡人
3節 強迫性パーソナリティ	小堀 修	3節 怒り・攻撃性	榎本知子
4節 境界性パーソナリティ	福森崇貴	4節 他者の利用と他者の操作	寺島 瞳
5節 自己愛的パーソナリティ	川崎直樹	5節 対人恐怖・対人不安・社会不安	清水健司
13章 パーソナリティと不健康		6節 欺瞞・嘘	村井潤一郎
1節 不健康状態にかかわるパーソナリティ	小塩真司	15章 パーソナリティと問題行動	
2節 不安・心配	杉浦義典	1節 非行・犯罪	吉澤寛之
3節 抑うつ	長谷川 晃	2節 いじめ・不登校	荒木 剛
4節 劣等感	高坂康雅	3節 過度なダイエット	鈴木公啓
5節 解離体験	舩田亮太	4節 性感染症感染リスク	樋口匡貴
6節 不眠・悪夢	松田英子		

IV部 パーソナリティのポジティビティ

16章 パーソナリティと健康		17章 ポジティブ感情とポジティブ特性	
1節 パーソナリティと健康	堀毛裕子	1節 ポジティブ心理学の発展—パーソナリティ領域を中心に	堀毛一也
2節 健康と生理学的個人差	石原俊一	2節 主観的 well-being	上出寛子
3節 健康生成論とセンス・オブ・コヒアランス	藤里紘子	3節 ポジティブ・イリュージョン	外山美樹
4節 レジリエンス	井隼経子	4節 ポジティブ感情の機能	藤原 健
5節 ストレスコーピング	加藤 司	5節 ヒューマン・ストレングス	大竹恵子

V部 パーソナリティと社会・文化

18章 パーソナリティと対人関係		4節 法と性格	荒川 歩
1節 パーソナリティと対人関係	大坊郁夫	5節 情報メディアの影響	高比良美詠子
2節 特性理解の発達	林 智幸	6節 医療とパーソナリティ	山崎晴美
3節 養育の影響	酒井 厚	20章 パーソナリティと文化	
4節 愛着スタイルの個人差	金政祐司	1節 パーソナリティと文化	堀 正
5節 友人関係の個人差	岡田 努	2節 文化的自己観	吉田綾乃
19章 パーソナリティと社会環境		3節 自己高揚の個人差・文化差と社会的適応	小林知博
1節 学校・教育の影響	出口拓彦	4節 社会的スキルの個人差・文化差	毛 新華
2節 組織内の対人関係とパーソナリティ	日向野智子	5節 自己制御の個人差・文化差	尾崎由佳
3節 社会的環境と自己制御	原田知佳		

VI部 パーソナリティの把握

21章 パーソナリティ測定の基礎		22章 パーソナリティの把握方法	
1節 信頼性	井上裕光	1節 質問紙法	友野隆成
2節 妥当性	松田浩平	2節 投影法	藤田主一
3節 多変量解析	服部 環	3節 実験的手法	堀内 孝
4節 構造方程式モデリング	清水和秋	4節 観察・フィールドワーク	尾見康博
5節 潜在的な個人差の測定	森尾博昭	5節 面接法・物語法	文野 洋
		6節 研究倫理	大野木裕明

本書の特色

- ▶ 前身の『性格心理学ハンドブック』刊行から15年、待望の新版出来！
- ▶ 歴史や諸理論など総論からライフステージの各時期の諸問題、障害や問題行動、健康やポジティブ感情・特性、社会と文化、測定法や統計的分析など多岐にわたる項目を網羅
- ▶ 6部構成全22章107節、ベテランから新進気鋭の研究者108人による執筆陣！
- ▶ 最新の研究動向がわかる充実の引用文献収載
- ▶ 利用者の利便性を考えた人名索引・事項索引
- ▶ 判型は大きくて読みやすいB5判
- ▶ 心理学の初学者から研究者、大学・短大図書館、公共図書館、各種研究機関必備

「心理学ハンドブック」シリーズ

『新・青年心理学ハンドブック』

日本青年心理学会 企画・編

2013年8月刊行予定 ◎予価 23,100円（本体 22,000円＋税）

『新・発達心理学ハンドブック』

田島信元、岩立志津夫、長崎勤 編

2014年3月刊行予定 ◎予価 29,400円（本体 28,000円＋税）

3点揃えて
必備を!!

HANDBOOK OF
PERSONALITY

パーソナリティ
心理学
ハンドブック

企画 日本パーソナリティ心理学会
編集 二宮克美
浮谷秀一
堀毛一也
安藤寿康
藤田圭一
小塩真司
渡邊芳之

福村出版



福村出版

〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-11

<http://www.fukumura.co.jp> TEL 03-5812-9702

FAX 03-5812-9705

注文書

パーソナリティ心理学
ハンドブック

◎定価 27,300円（本体 26,000円＋税） ISBN978-4-571-24049-2 福村出版

お名前

ご住所（〒 ）

お電話番号

部 注文します

取扱い書店